

日瑞国交 150 周年記念「カール・ラーション・ゴーデン スタッフ来日講演会」

講師：Christina Ann Jonsson クリスティーナ・アン・ヨンソン館長(通称キア)

Caroline Edman カロリーネ・エドマン広報担当者

訳：宮田宜子 「カーリン&カール・ラーション友の会」代表

(スウェーデン社会研究所理事・北欧文化協会会員)

♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡

おかげさまで下記全日程を無事終了いたしましたことをご報告いたします。

2018年2月19日 18:00~20:00 北欧文化公開2月例会

津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス SA 202 教室 (約 70 名参加)

2018年2月20日 18:00~20:00 スウェーデン社会研究所2月例会

スウェーデン大使館アルフレッド・ノベール・オーディトリウム(80名参加)

2018年2月21日 17:00~19:00 「カーリン&カール・ラーション友の会」主催 講演会

19:30~21:00 交流パーティ 倉敷アイビー・スクエア (約 70 名参加)

♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡

「スウェーデンで最も愛されている画家」という言葉が必ず名前の前に付く Carl Larsson は、1853 年にストックホルムの貧しい家庭で生まれました。苦学しながらも、フランス留学中に身につけた独特な淡い色合いの水彩画で、自らの家族や住まいを描いたたくさんの絵は今も世界中で親しまれています。その絵を裏付ける家が、造られてから 200 年近くたった今も、絵の中の世界そのままにダーラナ地方スンドボーン村に残されています。今では 200 人を超えるラーションの遺族会が運営する「カール・ラーション・ゴーデン」は見学ツアーと企画展示とミュージアム・ショップの売り上げだけを収入源とする自立心に富んだ記念館です。スンドボーンは大画家カールが世捨て人のように都会を離れて定住したことが納得できるような限りなく静かで美しい村です。自身も芸術家であった妻のカーリンが、子ども 7 人の大所帯の主婦業も立派にこなしながら、その芸術的才能をいかんなく発揮した家具や刺繍、織物なども保存されており、北欧インテリアのお手本として今も古びることなく残っています。カーリンはまた裁縫、料理、庭造りなどの名人でもありました。堅苦しい常識や偏見に囚われない自由な発想のできる素晴らしい女性であったと思われま

私とスウェーデンとのご縁は 1993 年から約 1 年間、二男が AFS の留学生として滞在したことから始まりました。1998 年の最初のスウェーデン旅行は息子の後ろをついて歩くだけでしたが、たちまち大好きになったスウェーデンの人たちの言語でおしゃべりできるようになりたい！ と考え帰国後スウェーデン語を習い始めました。その後、夫の闘病生活中を除いた 2006 年からほぼ毎年 1~2 回行くようになりました。2008 年には二男のホスト・ペアレンツのウルリックがとアニタがダーラナ地方を巡る 3 泊のドライブ旅行に連れて行ってくれ、憧れのカール・ラーショ・ゴーデン訪問もかないました。その時ミュージアム・ショップで買った「Resan till Carl Larsson-Gården カール・ラーション・ゴーデンを訪ねて」という絵本の翻訳を帰国後始めました。再度現地で確認しなければわからないことがたくさん出てきて、2010 年 9 月にアニタが車で連れて行ってくれました。この旅に出る前に、偶然ラーションのお孫さん(四女シエスティの三女)のカーリンさんを紹介され、恐る恐る出した手紙に「私は、おじいさんと同じく日本も日本人も大好きなのよ！ スウェーデンに滞在中に何回でも会いましょう！」という思いがけない返事をいただき、その後現在に至るまで親しくお付き合いをする仲になりました。またカーリンさんからは、従兄で Sundborn 在住のラーシュ・ラーション・ヒュッテさんも紹介され、絵本の中の登場人物とそっくり同じに館内

の案内をしてもらいました。ウルリックとアニタからは「スウェーデン人でもカール・ラーションの孫と友達になれるもんじゃないよ！」とうらやましがられています。スウェーデンを訪れると必ず Sundborn 村に滞在し、カーリンさんの別荘（と言っても納屋を使った小屋ですが、すてきな内装でした）に泊めていただいたり、お身内の夏至祭のパーティに仲間入りさせていただいたり、ゴードンの館長にも紹介してもらいました。またカーリンとダンナさんのダーヴィッドがメンバーになっているマセール室内合奏団の演奏会やクリスマス・パーティにも参加したり、曾孫、曾々孫とも仲良くなり、スンドボーン村にもたくさん知り合いもできました。

実は 2016 年秋、カール・ラーション・ゴードンは存亡の危機に見舞われていました。

ゴードンの元財務部長の男性による約 1,000 万クローナ（日本円で約 1 億円以上）の使い込み事件が発覚したのです。Facebook のカール・ラーション・ゴードンのサイトから刻々と入る「助けてください！ 額の多少は問いません！ このままでは閉鎖しなければなりません！」という悲痛な書き込みと国外の銀行からの振込口座も書いてありました。私にとっては他人事とは思えず様々な集まりがあるたびに手作りの「芳志箱」を持ち歩いて協力をお願いしていましたが、2016 年 11 月 JISS 例会の際にもメンバーの皆さまからご協力をいただきました。深く感謝しております。

11 月末に箱の中味を確認しましたら予想以上にたくさん集まっていた「これは高い振込手数料を払うよりも自分で持って行こう！」と決心し 12 月 3 日に日本の皆さんの真心と共に届けてまいりました。もちろん「空っぽになった」ゴードンの金庫をいっぱいにするほどの額ではなかったのですが、複数の責任者として立ち会ったキア館長とカロリーネは「カールが行ったこともないのに『私の心のふるさと』と書き残した日本の人が助けに来てくれた！」と涙を流して喜んでくださいました。この時「ところで 2018 年は国交 150 周年記念の年ですが日本のどこかの美術館か研究所からカール・ラーション関係のイベントのオファーは来ますか？」という私の間に「どこからも、なんにも」という返事だったので無謀にも「じゃあ、私が頑張る！」と言い放ってしまいました。「ゴードンが比較的暇な頃、二人分の飛行機代だけはなんとかします」ということだけを決め、具体的な日程などは 2017 年 7 月の 1 週間の滞在中に決めました。メールや Messenger でのやり取りであれこれ決めていき、今回のイベントが実現できました。年が明けて 1 月末にパワー・ポイントの画像とスウェーデン語の説明が送られて来てからは、訳をつけていく作業と 2 月 19 日から 24 日まで 6 日間フルアテンドの手順で頭がいっぱいの日々でした。今回ラーションの絵はあまりパワーポイントに入っていませんでしたが、web で検索すればいくらでも見られます。送られてきた訳に加えて今まで読んだ本をもとに私なりの説明を付け足し、より深く理解していただけるようにと心を配ったつもりですが今から思えば至らぬことだらけでした。それでも今回のイベントをきっかけに「カール・ラーション・ゴードンに行ってみたい！」「もう一度訪れてみたい！」という方が増えることを心から願っております。大学の同窓会岡山支部の応援を受けての倉敷での会も超満員の盛況でした。AFS の留学生としてスンドボーンから帰国したばかりのお嬢さんが山口県から来てくださるとい、うれしいハプニングもありました。その後鎌倉でも一泊し、2 月 24 日朝帰国の途につかれました。今夏のスンドボーンでの企画展は「カール・ラーションとジャポニズム」と決まっており、その時使う日本の品々もお二人は買って帰られました。9 月には新宿の損保ジャパン日本興亜の美術館での「カール・ラーション展」開催も正式に決定したようです。

お二人とも「カールの心のふるさと」に来られたことを大変喜んでくださいました。

さらに詳しい情報は「カーリン&カール・ラーション友の会」ホーム・ページをご覧ください。

<http://www.karin-and-carl-larsson.net/>

宮田宜子